

スペイン語通訳自習室

—コロナ禍のコミュニティ学習の場—

吉田理加

1. はじめに

日本では、2020年2月にクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号において新型コロナウイルスの集団感染が発生した。瞬く間に感染は拡大し、世界はパンデミックの状況に陥った。それまで想像もしていなかった事態であった。

感染拡大がいつ収束するのか見通しが立たない中、対面での集まりは中止され、授業や会議を含め、多くの活動がオンラインへと移行した。通訳者の就業形態も大きく変化した。日本政府は外国人の入国を禁止し、日本国内に滞在許可を持っていた人々でさえ再入国できない状況が生じた。その結果、ビジネス、国際会議、スポーツ交流などの往来は途絶え、海外からの入国は完全に停止された。それにより通訳業務案件は激減し、通訳者は依頼業務がほぼない状況に陥り、不安で孤独な日々を過ごすことになった。

筆者は当時、フリーランス通訳者として活動するために大学の専任教員職を辞したばかりであった。その矢先に、将来の見通しが立たない不安定な世界情勢に直面することとなった。フリーランス通訳者同士は、通常、共に仕事をする機会が多いわけではない。というのも、通訳業務は一人で担当することが多い職種だからである。また、通訳者同士は職業上の競争関係にある場合も多く、一定の距離を保つ関係性でもあった。しかし、スペイン語通訳自習室では、共に学び、精神的な落ち着きを取り戻し、いつの日かパンデミックが終焉した際にまた、通訳の仕事ができるように通訳技術を維持しようとして共に学ぶ環境ができた。

2. 共に「変容」を学ぶ場としての通訳自習室

2.1 通訳自習室の概要

2020年2月頃から、英語通訳者による朝のオンライン通訳自習室が始まった。それを契機として、スペイン語や中国語でも通訳自習室が立ち上がり、同じ言語ペアの通訳者が集うコミュニティの場が形成された。

スペイン語の通訳自習室は、筆者が呼びかけ人となり、スペイン語通訳者の仲間に声をかけて立ち上げたものである。遠隔会議プラットフォームを活用し、通訳業務の依頼が途絶え、自宅待機を余儀なくされ、不安を抱えながら孤立していた同業者が、週2回、各回1時間、オンライン上で集い共に学習する取り組みであった。

当時、多くの通訳者が使い始めたZOOMを利用し、同じ時間に接続して同一の動画教材を用い、各自がカメラオフ・音声ミュートの状態で約30分間自習する方法を基本とした。その後、全員がカメラをオンにし、自習中に生じた疑問点を共有・確認するとともに、当該教材を用いた逐次通訳および同時通訳の練習を行った。

各回の自習室では、モデレーター(ファシリテーター)を定め、その日の練習テーマを設定し、テーマに適した動画を選定して通訳練習を実施した。教師は置かず、参加者が交替でモデレーターを務めた。開始からしばらくすると運営の流れが定着し、開始前のラジオ体操やストレッチ、約30分間の自習、その後の訳語確認、ロールプレイ形式の通訳練習、クイックレスポンス練習、さらにブレイクアウト機能を用いた小グループ練習なども取り入れられるようになった。

参加者は最大で40名近くのにぼり、日本国内のみならず、メキシコやアルゼンチンなど海外在住の通訳者も参加した。その結果、日本語・スペイン語通訳者間の国際的ネットワークが形成され、持続的なコミュニティが構築された。

さらに、スペイン語通訳自習室では、通訳者自身の実践経験を共有する公開講演会も開催された。「リモート通訳」「医療通訳と私」「中世美術へのいざない」「〇〇の部屋」などのテーマで、通訳者自身が講師となり講演を行った。また、外部講師を招いて「ボイストレーニング」を実施するなど、通訳者の専門的成長につながるセッションも自主的に企画された。これらの活動はいずれもオンラインで実施された。

2.2 通訳自習室で共に学ぶとは

コロナ感染拡大がもたらしたものの一つは、自宅待機や隔離生活であった。その結果、通訳業

務の依頼は激減し、多くの通訳者が孤独感にさいなまれ、中には抑うつ状態に陥る者も少なくなかった。とりわけ、収入が途絶え、今後の見通しが立たない状況下で外出も人との対面も制限されるなか、孤独に苦しむ通訳者が多く存在した。

一方で、感染拡大は技術革新も促した。対面での集まりに代わり、遠隔会議ツールを用いたオンライン会議が主流となり、それに伴いオンライン通訳が急速に普及した。遠隔同時通訳に特化したバーチャルブースを備える会議システムも開発されたが、とりわけ ZOOM が同時通訳機能を搭載していたことから、広く利用されることとなった。また、同時通訳に限らず、オンライン会議における逐次通訳の機会も増加した¹。

しかし、オンラインでの通訳は、対面通訳とは異なる困難さを伴うものであった。通信環境、機材操作、参加者間の発話管理など、これまでとは異なる条件に適応する必要があり、通訳者は新たな業務環境に順応することを求められた。

通訳自習室は、通訳業務が停止している間も技能の維持・向上を図るため、仲間とともにオンラインで練習を行う場として機能した。同時に、ZOOM をはじめとするオンライン会議ツールを実践的に使いこなす力を共に学ぶ場ともなった。

換言すると、参加者は、週に2回朝8時または夜8時に開催されるスペイン語通訳自習室に集まって通訳者間の精神的な繋がりを感じながら、経済活動である通訳業務を再開できる時のために同業者間のネットワークや連帯感を醸成した。そして、コロナ禍がもたらした技術革新を肌身で感じながら、通訳スキルや専門的言語能力を維持するための学びを継続し、新たな現実で求められるテクノロジーを駆使する術を習得することができた。

3. まとめ

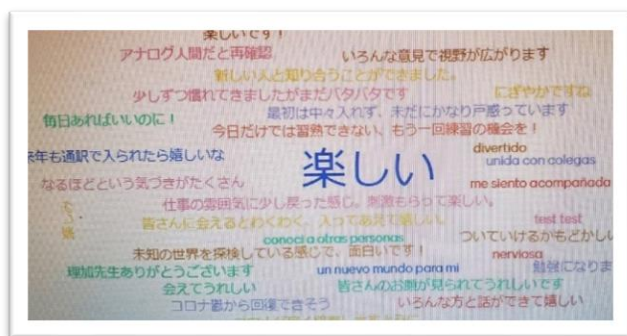
コロナ禍により通訳業務が停止し、日常的な収入が途絶える状況のなかで、通訳自習室は同業者間のつながりを再構築する場となった。それは、孤独感を緩和し、不確実な状況下において前向きに日々を過ごすための心理的・実践的支えとなるコミュニティとして機能した。

その特徴は、同業者が自主的に学習の場を構築し、通訳技術や専門的・言語的知識を共有すると同時に、それまで十分に経験してこなかったオンライン通訳環境や新たなテクノロジーの活用方法を共に学んだ点にある。急激な環境変化に対し、個人で適応することは容易ではなかったが、

共同で学習することにより、新たな状況に順応することが可能となった通訳者も少なくなかった。

かつて経験したことのない困難な状況下で協働し、学びを共有した経験は、コロナ禍が落ち着き社会が平常を取り戻しつつある現在においても、参加者にとって重要な記憶として残っている。

最後に、写真1には自習室終了後の感想をワードクラウドとして可視化したものを、写真2にはオンライン通訳時の作業環境(机上のPC配置等)を記録として掲載する。



【写真1】スペイン語通訳自習室の感想



【写真2】遠隔通訳者のデスクセッティング

(吉田理加 よしだ りか 愛知県立大学外国語学部)

参考文献

吉田理加(2022).「コロナ禍における日西通訳業務の変容と遠隔通訳:日西通訳者への質問紙調査から」泉水浩隆(編).『翻訳と通訳の過去・現在・未来』213-242頁.三修社.

注

¹ コロナ禍における日西通訳業務の変容と遠隔通訳については、吉田(2022)を参照のこと。